

態度の感情的ないしは評価的側面に関する研究

— 既知の態度対象を用いた場合における情報統合モデルの適用の検討 —

佐 伯 道 治

問題および目的

従来、対人態度に関する研究、わけても「印象形成」に関する研究において、人の印象を数量的に把握し分析する試みが数多くなされてきている。それらの研究では印象の形成を情報統合の問題として扱っており、印象の評価値 (like-dislike あるいは good-bad というような単一評価次元上の判断) が、架空の刺激人物に帰着された特性個々の評価値から予測される、という考えに基礎を置いている。この予測のための数学的モデルは、これまでに幾つか提唱されてきているが、それらは全て線型モデルであり、印象の評価値が、個々の特性の一次結合の形で与えられるとするものである。

それらのうちで代表的なものに、加算モデルと平均モデルがあげられる。Fishbein, M. (1963, 1964)によれば、個人は所与の対象に関して数多くの信念を持ち、多くの属性、価値、目標等が当該対象と正または負に連合している。これらの関連対象のそれぞれには評価的反応が連合しており、それら個々の評価的反応が加算されて、当該対象に対する態度を構成するとしている。— $A_o = \sum B_i a_i$ 一方、Anderson, N. H. (1962, 1965)は、「個々の情報は、それぞれの評価判断値の平均化された形で全体印象に統合されていく」という平均モデル— $J = \sum W_k \cdot S_k / \sum W_k$ —を、また Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. (1957)は、個々の判断値の極性度 (polarity) で重みづけた平均であるとする適合モデル— $J = \sum |d_k| \cdot d_k / \sum |d_k|$ —を提唱している。

Asch, S. E. (1946)以来の印象形成研究の流れの中で中心的な課題となったのは、架空の刺激人物に対する印象が、彼に帰着された個々の特性評価値の加算化によるものか、あるいは平均化の形で統合されるのかに関する議論であった。しかしこの点については、多くの研究者がそれぞれに支持的な証拠や反証を報告しており、未だ統一的に整理されていないと言える。

ところで従来の研究では、モデルの実験的検証の上で条件統制が容易であること、更には「情報統合の過程」の問題に研究の力点を置くことから、そのほとんどが、架空の刺激人物を対象にし、パーソナリティ特性を情報

刺激として呈示するという形式を取っている。しかし、筆者は、モデルの一般性を吟味する上でも単に架空の対象ばかりでなく、より現実味を帯びた、自我関与の高い対象に、また人物以外の対象にまで拡張した場合の検討が必要と考える。そこで本研究では、現実場面に即し情報統合モデルの予測性に関して分析・検討を試みることにした。

我々を取り巻く多種多様な態度対象を、ここでは、対象がもつ構造的な性質の差異という点に着目し、次の二様に区分してみた。

A: highly inclusive object … 対象が高度の包括性を帯びており、affective な反応を引き起こす構成要素に関して個人差があると仮定されるもの。

B: collective object … 対象の構成要素が一義的に定まり、かつ構成要素の相互が比較的独立に存在すると仮定されるもの。

情報統合モデルの予測性に影響する要因としては、従来の知見から、1) 構成要素間の相互作用、2) 当該対象に関する構成要素の多少、が考えられ、対象 A・B の比較では、モデルの予測力は A のタイプが相対的に低いであろうと予想された。

本研究は、実験Ⅰと実験Ⅱによって構成されている。実験Ⅰでは A のタイプとして実際の人物を、実験Ⅱでは B のタイプとして、特定の教科の組み合わせからなる「授業」を取りあげた。

実験Ⅰ

実験Ⅰでは、中学生男女を被験者とし、2名の教師を対象とした。うち一方は、対象一被験者が授業を通じ互いに既知である関係 (H条件)^{*}、他方はそうでないもの (L条件)^{**}とされた。予備調査により、各々の人物に関する代表的特性として、性格特性リストのチェックから、反応頻度の高い6項目とそれらの対項目を選択した。本調査では、以下3種類の評定を求めた。④特性評定……

* Highly interacted, Low interacted

** L条件においても、各被験者は当該人物について全く未知というのではなかった。

当該人物に関する代表的特性の個々に対する好意度を、「感じのよい—感じのわるい」、「すき—きらい」の両7点尺度で評定させた。⑥ 帰着評定ならびに評定の確信度……当該人物に関する特性帰着を「特性A—特性Ā」の各7点尺度で、またその際の確信度を4点尺度で評定させた。⑦ 人物評定……当該人物に対する好意度を、④と同じ尺度で評定させた。

④で得られた特性個々の尺度値から、以下の3種類の平均公式を使って、当該人物に対する好意度の予測値を個人毎に算出し、⑦で得られる実測値との対応の程度を実測値と予測値との相関係数、および(実測値—予測値)の絶対値(|d|)によって調べた。

①単純平均公式…… $P = \sum_i x_i / n$ ②極性度で重みづけた平均公式…… $P = \sum_i |x_i| \cdot x_i / \sum_i |x_i|$ ③特性の帰着強度で重みづけた平均公式…… $P = \sum_i |a_i| \cdot x_i / \sum_i |a_i|$ ***

得られた結果は次の通りである。H条件とL条件の比較では、相関係数、|d|の両指標ともに、いずれの平均公式の予測力もH条件において優れることが示された。H条件での、実測値と予測値との相関係数0.43~0.57の値は、Anderson, N. H. (1962)の結果 $r = 0.967$ には遠く及ばないものの、Triandis, H. C., & Fishbein, M. (1963)の $r = 0.65, 0.53$ やHackman, J. R., & Anderson, L. R. (1968)の $r = 0.65, 0.41$ にはほぼ一致するものであり、架空の刺激人物を対象とした場合のみならず、実際の人物を扱った場合にも、同程度に当てはまることが示された。予測公式の比較では、②の極性度で重みづけた平均公式が、他と比べて予測力が相対的に低いことが分かった。また①と③は、ほぼ同程度の対応の良さを示し、③の、特性の帰着強度は、重みとして余り有効でないことが示された。これについては、別途に行なわれた追加実験により、特性の帰着強度と評価の極性度との間に、必ずしも一義的な対応のないことが分かり、全ての特性について帰着強度で重みづけることには無理があると考えられた。また全般的にみると、帰着特性数の多少が、予測力に影響することが示された。しかしH条件では、その傾向はそれほど顕著にみられず、このことは、少数の帰着特性だけで当該人物に対する好意—非好意を判断してしまう者の存在を、示唆していると解釈された。

*** x_i ……特性の帰着評定⑥において、帰着された側の特性に対する好意度。(尚、帰着評定尺度上の中性点に帰着された場合には、帰着特性としてカウントされず、予測値の算出に用いられない。) $|x_i|$ ……帰着特性に対する好意度評定の極性度、即ち中性点からの逸脱度。n ……帰着特性の数 $|a_i|$ ……特性の帰着強度、即ち帰着評定尺度上の中性点からの逸脱度。

実験Ⅱ

実験Ⅱでは、中学生男女を被験者とし、特定の教科の組み合わせからなる「授業」を対象とした。国語、数学、社会、理科、英語の5教科から3教科を選ぶ組み合わせに教科の順序を考慮して、計60種類のセットを構成した。被験者には、このうち10セットが与えられ、以下の評定が求められた。④ コンポーネント評定… 個々の教科の授業に対する好意度を、「おもしろい—おもしろくない」「すき—きらい」の両7点尺度で評定させた。⑤ セット評定… 3教科の組み合わせからなる「授業の全体」に対する好意度を、④と同じ尺度で評定させた。

④で得られた個々の教科の尺度値から、次の2種類の平均公式を使って、セットに対する好意度の予測値を個人毎に算出し、⑤で得られる実測値との対応の程度を、実験Ⅰと同様に、相関係数および|d|の指標によって調べた。

①単純平均公式… $P = \sum_i x_i / n$ ②極性度で重みづけた平均公式 …… $P = \sum_i |x_i| \cdot x_i / \sum_i |x_i|$

結果は以下の通りである。実測値と予測値との相関係数(10セット込み)は、0.52~0.64の値であり、実験Ⅰの場合と比較して僅かに高いものの、当初の予想を支持するに十分とは言えない。個人毎に、10のセットに関する実測値と予測値との相関係数を算出したところ、かなりの変動が認められた。個人内相関係数の低い群では、実測値が予測値よりもニュートラル方向に偏る一貫した傾向がみられた。このことは、ある程度まで実験の不備に帰せられるものと考えられた。即ち、本実験では1人宛10ものセットが与えられたために被験者の中にはこれらを弁別して反応することをせずに、ニュートラルな反応を自然多く示す者が存在していたと解釈された。また、重回帰分析による結果では、教科の順序が重みの機能を果たすとは言えず、特定の教科が、他と比べてより大きな重みをもっていることが示された。

実験Ⅰ、実験Ⅱを通して、架空の対象から現実の対象に、更に人物以外の対象にまで拡張した場合にも、平均公式の予測性は、かなり高いと言えることができる。しかし、当初予想されたような対象別の差異は、ここでは明確化されなかった。この点に関して、単に実験上の不手際に起因するというよりも、対象の範疇化に少なからぬ問題が残されると考え、討論において指摘された。